



AUE Monthly



2010年 3月 1日

第 20 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500

目 次

- 行事予定(3月)
- トピックス
 - ・本年度科研費採択率で本学がベスト 30
 - ・学生の「若者を選挙に行かせる企画」
 - ・太陽光発電システムが始動
 - ・ホロコースト教育資料センター代表が講演
 - ・環境リサイクル市の物品回収
 - ・教員研修留学生懇談会
 - ・冬の特別演奏会
 - ・メンタルヘルス研修会
 - ・恒例のもちつき大会
 - ・理事, 教員らがフィリピン訪問
- ・中日新聞論説主幹が講義
- ・英語教育講演会
- ・スケッチ画家が学長と再会
- ・企業研究セミナー
- ・パキスタン教育研修閉講式
- ・理科離れ実相調査ミニ・シンポジウム
- ・Bouvier氏が世界CMについて講演
- ・授業改善シンポジウム
- ・教職大学院修了報告会
- ・前期入試を実施
- お知らせ・報告・投稿
- ・附属図書館ホールのお称を募集
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

行事予定(3月)

- 1日(月) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 2日(火) 臨時役員会(10:00~ 学長室)
6年一貫教員養成コース会議(16:40~ 第三会議室)
- 3日(水) 学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
- 5日(金) 安全衛生委員会(15:00~ 第五会議室)
教務企画委員会(16:40~ 第二会議室)
- 8日(月) 代議員会(9:00~ 第五会議室)
役員会(13:30~ 学長室)
- 10日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
環境リサイクル市(13:00~ 15:00 講堂前広場)
- 15日(月) 第二期中期目標・中期計画策定委員会(9:30~ 第三会議室)
役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 16日(火) 教職員会議(13:00~ 第一会議室)
教授会(13:30~ 第一会議室)
- 17日(水) 教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
財務委員会(15:30~ 第五会議室)
- 19日(金) 経営協議会(15:00~ KKRホテル名古屋)
- 22日(月) 代議員会(9:00~ 第五会議室)
- 23日(火) 卒業式(10:30~ 講堂)
役員会(13:30~ 学長室)
- 25日(木) 大学院修了式(18:30~ 第五会議室)

トピックス

本年度科研費採択率で本学がベスト 30 (2/1)

文部科学省は 2 月 1 日(月)、2009 年度科学研究費補助金(科研費)採択に関するデータを公表し、本学が、同年度科研費採択率でベスト 30 入りしたことがわかった。総採択件数 5 万 9 千件、総額 1,584 億円(直接経費)のうち、新規採択分は、10 万 4 千件の応募に対し約 2 万 6 千件を採択し、配分額は約 679 億円。

文科省は、1. 研究者が所属する研究機関別採択率(新規採択分及び新規採択+継続分)、2. 同配分件数(新規採択分及び新規採択+継続分)に関する上位 30 の研究機関、及び研究機関別の採択件数・配分一覧などを公表している。このうち「1. 研究者が所属する研究機関別採択率(新規採択+継続分)」で本学が 52.9%(採択件数 55 件)となり、第 30 位にランクされた。「上位 30 に本学が掲載されるのはおそらく初めて」という。なお、東学大が第 20 位(57.2%、99 件)、奈良教育大が第 23 位(55.9%、33 件)にランクされている。トップは一橋大学(73.8%、127 件)だった。

教員養成系大学のデータは次のとおり。

| 合計額順位 | 大学名 | 採択件数 | 配分額(単位:千円) | 間接経費(単位:千円) | 合計(単位:千円) |
|-------|---------|------|------------|-------------|-----------|
| 1 | 東京学芸大学 | 99 | 149,300 | 40,260 | 189,560 |
| 2 | 鳴門教育大学 | 31 | 110,600 | 32,340 | 142,940 |
| 3 | 北海道教育大学 | 66 | 97,961 | 28,818 | 126,779 |
| 4 | 大阪教育大学 | 62 | 85,919 | 20,316 | 106,235 |
| 5 | 愛知教育大学 | 55 | 69,648 | 19,844 | 89,492 |
| 6 | 兵庫教育大学 | 44 | 65,990 | 16,077 | 82,067 |
| 7 | 奈良教育大学 | 33 | 42,700 | 12,510 | 55,210 |
| 8 | 京都教育大学 | 34 | 39,860 | 11,568 | 51,428 |
| 9 | 福岡教育大学 | 35 | 37,570 | 10,911 | 48,481 |
| 10 | 上越教育大学 | 39 | 36,080 | 10,824 | 46,904 |
| 11 | 宮城教育大学 | 29 | 32,620 | 9,366 | 41,986 |

詳しくは、文科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/1289168.htm

を参照ください。

学生の「若者を選挙に行かせる企画」(2/2)



「若者を選挙に行かせる企画」というユニークな授業が 2 月 2 日(火)、本学第一共通棟で行われた。美術選修・専攻の 2 年生が対象の「デザイン実技」で、学生が半年かけて考え、調査して完成させた企画。この日が、7 チームに分かれてプレゼンテーションをして締めくくる最終授業。富山邦夫教授(美術教育)の指導で計 31 人が 4、5 人のグループごとにパワーポイントを使ってそれぞれの企画をアピールした。

アンケート結果を分析して「選挙に関心がない」「政治が信用できない」「面倒くさい」「自分にメリットがない」が低投票率の原因とした。その上で各グループは次々とユニークな解決案を提案した。

あるグループは「選挙はお得」のイメージ戦略を展開すべきとして、若者向けの献血キャンペーンを例に、投票後に飲食を提案。投票所にはハンバーガーなど若者が好む食べ物を企業からの試食品提供の形で用意し、漫画、フィギュアなども置くとした。別のグループは若者が集まる東京ディズニーランド（TDL）を特別の投票会場とすることを提案。千葉県浦安市が成人式をTDLで実施したところ出席率が50%程度から70%以上に跳ね上がったことにヒントを得たという。また、最も身近な選挙である市長選を祭りに合わせて実施。例えば豊田市の豊田スタジアムを投票所に、屋台も入り、若者が祭りを楽しみ、同時に投票すれば投票率はアップすると強調。親と一緒に投票所へ行ってもらう「親子丼計画」や友達と連れだって投票にいらしてもらうよう、例えば愛教大の講堂、学生会館を投票所にする提案も。



教育大学の学生らしい提案は「選挙キッズ育成計画」と「プレゼントブック計画」。前者は小学校の6年間で「票入れゲーム」「選挙ゲーム」などを通して選挙とは何か、自分の意思を社会に表明することの大切さを児童会選挙に合わせて教えていく方法で、授業内容にまで踏み込んで提案した。後者は生まれたばかりの子どもに親に絵本をプレゼントし、読み聞かせにより、将来、投票する若者に成長してもらう作戦。大人が投票に行く姿を夢いっぱい描き、投票箱が飛び出す手作りの立体絵本も作成して披露、驚きとともに大きな拍手が送られた。

文部科学省の方針、公職選挙法上などから困難が伴いそうな企画もあったが、学生の「投票率アップ作戦」はいずれも学生自らの問題として考えただけに価値があるものばかり。

富山教授は「プレゼンテーションの内容はなかなかよかったと思う。デザインは問題解決のマネジメント。選挙は学生がまじめに考えすぎるか、逆にしらけるのではとも考えたが、例年になく盛り上がる授業となった。2年生は成人の年齢で、教員としてはこの授業を機に学生が投票に行っていほしいとの期待もあった」と話していた。



この授業を新聞報道で知って関心を持ったという牧野一吉尾張旭市議が2月22日（月）、本学を訪れ、富山教授と懇談した。

牧野市議は選挙での若者の投票率アップなどについてこれまでに市議会で質問をしており、学生の企画提案の詳細を知りたいと富山教授を訪ねたもの。資料などに目を通した牧野市議が「なぜこのテーマを選んだのですか」「授業を体験した学生はしなかった学生に比べてより多くの方が投票に行くのでは」と質問。教授は「この企画を機に学生は投票に行くと思います」と答えていた。市議は「学生

の発想は非常に面白い。企画の中にはすでに一部自治体で実施されているケースもあります。学生の目の付けどころに感心しました。企画の中には今後、実現可能なアイデアなどもあり、半年以上かけて考えてきた取り組みは意味がありますね」と語っていた。

市議の市議会質問への参考になったようで、将来、学生の企画、アイデアが議場で取りあげられる可能性もありそうだ。

太陽光発電システムが始動(2/2)

本学附属図書館屋上に設置したパネルによる太陽光発電が2月2日（火）、始まった。パネルは附属図書館と美術・技術・家政棟屋上の2カ所で着工し、図書館部分が一足早く稼働したもの。美術・技術・家政棟は3月25日（木）から発電を開始する予定。附属高校などでは1999年に太陽光発電を導入しているが、大学への設置は初めて。

各屋上には1枚1・5平方メートルのパネルを264枚（計392平方メートル）が設置され、1カ所の発電容量は50キロワットで、約15～20軒分の電力に相当する。2カ所が同時に稼働すると、年間11万キロワット（大学の消費電力の2・2%の電力）を削減することができ、CO₂は本学年間排出量（2979トン）の1・6%に当たる年間46・6トンを削減できる。

太陽光発電は昼間の電力ピークカットや廃棄物が発生しないなどの利点がある一方で導入費用が



高めで天候にも左右されやすい。しかし、近年は機器の性能が向上し、保守なども容易で「環境重視型エコキャンパスの創造を目指す」（松田正久学長）本学では環境面での効果に大きな期待が寄せられている。

図書館屋上の太陽光パネルは整然と並び、天からの恵みの光を浴びて静かに発電。2階の入り口には監視モニターがあり、現在の発電量などの状況などが示されていた。

ホロコースト教育資料センター代表が講演(2/3)

NPO法人「ホロコースト教育資料センター」（東京都新宿区）代表の石岡史子さんが2月3日（水）午後、本学の共通科目「平和と人権」の特別講演を行った。ホロコーストの犠牲者約600万人のうち約150万人が15歳以下の子どもだった。

石岡さんは1999年、（虐殺された）子どもの遺品をセンターに展示できないかとアウシュビッツ博物館を訪れて依頼したところ、翌年、スーツケースが送られてきた。そこには13歳でガス室に消えた「ハンナ・ブレディ」の名前と誕生日が書かれており、独自に調査して、ハンナの兄、ジョージさんがカナダで生存していることを突き止めた。



ジョージさんは日本で妹のケースと「再会」し、この物語をラジオプロデューサーが書いた「ハンナのかばん」がベストセラーとなった。

石岡さんはこれを日本語に翻訳するとともに、今はこのかばんを持参して各地の学校などを回り、悲劇の教訓を伝えている。ハンナの本当のかばんは放火により消失したが、精巧に複製され、この日も石岡さんは大きなスーツケースの中から白い手袋をして丁寧にかばんを取り出して机の上に置



き、約70人の学生に見せていた。

講義では1933～1945年に行われたユダヤ人虐殺についてヒトラーの写真、当時のドイツ社会の動画などを写しながらヒトラーが合法的に政権を取った社会的背景、虐殺に荷担した市民、ユダヤ人救出者の姿や、ハンナが描いた絵やジョージさんから聞いたハンナの短い生涯を淡々と紹介した。その上で石岡さんは「平等と言うのは簡単だが、異質なものを排除するなど人には弱さもあります。それぞれがまず、人間の弱さに向き合うことが大事だと思います」と静かに語りかけた。質疑もあり、学生らは「展示を考えたきっかけは？」「（ハンナの）家族を探すのは難しかったのでは」と質問。石岡さんは丁寧に答えた後、最後にカナダの中学生がハンナの人生と自分たちの関わりを歌にした曲を流し、聴講した学生らはハンナがかばんにつめた思いへの想像を膨らませている様子だった。



環境リサイクル市の物品回収(2/4, 2/5)



3月10日(水)に開催予定の環境リサイクル市に向けて、卒業・修了を予定している学生らを対象にした物品回収が2月4日(木)、5日(金)のお昼休みに、第一生協前で行われた。

当日は、厳しい寒さの中、生協学生委員、ラクビー部の学生にも協力してもらい、ピラ配り等広報活動を行った。数点の提供があり、リサイクル市では昨年の品とともに展示即売される。収益金は学内の緑化活動に活用されるが、

施設課では「開催日までは、しばらく時間がありますので、賛同される方のご協力をお待ちしています」と話している。

提供、問い合わせなどは同課(本部棟2階)まで。

教員研修留学生懇談会(2/9)

平成22年度入学教員研修留学生懇談会が2月9日(火)、本学第3会議室で行われた。対象となる6カ国6人の教員研修留学生は、名古屋大学での半年間の日本語研修を修了し、4月からは本学で学ぶ予定。

懇談会には彼らの先輩にあたる今年度の教員研修留学生4人をはじめ、名古屋大学留学生センター教員、本学の日本語教育教員、各指導教員、国際交流センター関係者及び事務局関係者が出席。

本学からは国際交流センター長の村松常司理事、日本語教育、指導教員らが出席して歓迎した。村松理事が「安心して学んでいただける体制になっています。病気などになったらすぐ申し出てください。留学期間中に友達をたくさんつくり、研修に頑張ってください」とあいさつ。和やかな雰囲気の中、名古屋大学及び本学における日本語教育についての報告に続いて自己紹介や質疑応答が行われ、留学生は教員や先輩留学生からの貴重なアドバイスに耳を傾けていた。

懇談会終了後にはそれぞれの指導教員と面談、宿舎となる国際交流会館への見学も行われ、初めて本学を訪れた留学生は、名古屋とはまた異なる自然豊かな環境と落ち着いた大学に大いに満足した様子で、間もなく始まる新生活への期待に胸をふくらませていた。



冬の特別演奏会(2/10)



本学学生によるランチコンサート「冬の特別演奏会」が2月10日(水)、附属図書館2階の多目的利用スペースで開催された。披露したのは音楽教育講座の4年生で、学生だけの同所でのコンサートは初めて。卒業記念の意味もあり、それぞれの分野を学んだ学生の集大成ともいえる力のこもった演奏などに集まった約80人の学生、教職員らは大きな拍手を送っていた。

管楽器の独奏はユーフォニアムによる「イントロダクション アンド ダンス」で、ピアノの伴奏とともに柔らかく丸味のある音色が会場を包んだ。声楽はソ

プラノ独唱で、プッチーニのオペラを情感豊かに歌い上げた。作曲ではピアノトリオ「ひみつきち」が演奏された。バイオリンなどの音色とともに「遊び」「黄昏(たそがれ)」「再訪(さい

ほう)」と自然の中の子ども隠れ家を彷彿とさせる曲だった。最後はピアノ独奏でスクリーパーピン「ピアノソナタ第5番」を鮮やかな指さばきで熱演した。

それぞれ短時間だったが、完成度の高い演奏に聴衆は魅了されていた。

メンタルヘルス研修会(2/10)

「鬱(うつ)の時代」ともいわれる現代において心の健康を考えようと「メンタルヘルス研修会」が2月10日(水)、本学安全衛生委員会主催で開催された。講師は大学保健環境センターの岡田暁准教授(産業医)で、教職員約60人が参加した。

折出健二理事が「心の問題は、複雑な社会の中で必ず向き合わなければならないテーマ。身近なことでもあり、今すぐ役立つこと、予防につながることをわかりやすく説明していただけるはず。最後まで聞いてください」とあいさつ。続いてビデオが



上映され、企業が社員の自殺を機にメンタルヘルスに取り組み、保健師の活躍、発想の転換、治療などで、何人かの社員が心の問題から解放され、元気に職場復帰する姿などが紹介された。

ビデオに則したテキストが配付され、心の健康セルフチェック表やうつ病の早期発見のための12項目(意欲減退、不眠など)、ストレス・マネジメントのこつ(自分の頑張りの限界を知り蓄積疲労を防ぐ、自分の考え方の癖に気付くなど)も書かれており、参加者は早速自己点検をしていた。岡田准教授は「心の健康は気長につきあっていくテーマ。完璧主義の人が鬱病になりやすいとされるが、仕事を始めて何年かたつと、本来の自分の姿を見ずに仕事をしているのでは。これを機に自分自身を振り返ることが大事です」と話した。

恒例のもちつき大会(2/10)



本学の職員組合と生活協同組合の共催による恒例のもちつき大会が2月10日(水)昼、第一生協前で行われた。本学産のもち米3升を釜で炊き上げ、石臼へ。職員らが交代で杵を持ち上げてついたが、飛び入りで学生が参加する場面もあった。もちは生協職員らが小さくちぎってはあんこ、きなこなどをまぶして希望者に提供。無料とあってたちまち学生、教職員ら数十人の長い列ができた。もちはすぐなくなり、大会は終了したが、学生らは屋外でつくたてのもちをほおぼって

笑顔で普段とひと味違った昼食を楽しんでいた。

理事、教員らがフィリピンを訪問(2/11~2/14)

本学の理事、教員らは2月11日(木)から14日(日)までの4日間の日程で、文部科学省の平成21年度「国際協力イニシアティブ」教育拠点形成事業により、フィリピンのイロイロ州にあるウェスタンビサヤ技術科学大学及びコロンプラン・スタッフカレッジを訪問した。

訪問目的は、同事業で本学が本年度新しく編集・作成した実習テキストを用いた授業実践及び講演等を開催すること。

今回の訪問は、技術教育講座の宮川秀俊教授、同清水秀己教授、保健環境センター久永教授に加え、国際交流センター長の村松常司理事及び稲吉隆国際交流室長も参加した。



愛知教育大学は、平成 11 度から毎年継続して日本国際協力機構（JICA）の集団研修「産業技術教育」コース、並びに国別特設「工業教育」、「教育カリキュラム開発」、「学校教育改善」研修コースを実施してきた。これらの実績を高く評価され、平成 19 年度から「国際協力イニシアティブ」教育拠点形成事業を委託され、本年度が 3 年目。

活動テーマは「開発途上国の産業技術教育を支援するコアカリキュラム提供システムのモデル構築」。本年度は、実習テキストのコアカリキュラム編成と、そのコンテンツの編修と評価票の作成を行うこととしている。

昨年の 11 月には、産業技術教育に積極的に取り組んでいるフィリピンのコロンボプラン・スタッフカレッジにおいて、実習テキストの PR 活動とその検証を行うためのワークショップを開催した。



ウェスタンビサヤ技術科学大学では、学長はじめ多くの大学スタッフ、学生たちが参加する中で、本学の講師 3 名（宮川、久永、清水の各教員）が実習テキストに関する説明をプロジェクターを使用して講演を行い、参加者たちは熱心に耳を傾けていた。

講演終了後には、参加者から多くの質疑応答があり、活発な意見が出された。引き続き、同大学における技術教育関係の授業をいくつか参観する機会もあり、貴重な意見を多く頂き、また多数のアンケート調査結果も集計ができるなど大きな収穫があった。

中日新聞論説主幹が講義(2/12)

NIE（教育に新聞を）の最終講義が 2 月 12 日（金）、本学で行われた。美術教育 3 年生対象の総合演習で、「市民参加型教員養成授業」の一環として中日新聞の深田実論説主幹が講師を務めた。

配布されたレジメに基づいて「新聞とは何か」から講義が始まった。深田氏は情報が必要不可欠な水や空気のように気付きにくい存在とした上で、アメリカの事例を紹介。新聞がなくなった場合、その地域では政治の新旧交代が減少し、地域への関心が薄れて投票率が低下、内部告発もなくなり汚職が増加したなどと説明。続いて、小沢一郎民主党幹事長の政治団体を巡る事件とメディアについて話し、日本の公共事業における談合や田中角栄元首相の日本列島改造論以来の政治と金にまつわる背景を解説した。小沢幹事長を不起訴とした検察については「国策捜査」「ヤメ検」などと国民がマイナスイメージで見るとの傾向があり、威信が傷ついていたとも指摘し、検察が今後、脱税で起訴に持ち込めるかが注目点とした。

デマの心理学などに触れ、最後にテレビの暴力シーンを見た人がそれを現実と錯誤し、現実以上に怖がる現象を取り上げた。「京都での治安悪化に関する意識調査で、不安を感じたのは古くから近所付き合いがあり、情報交換している住民では 33% だった。一方、近隣とのコミュニケーションが薄いマンション住民の 55% が不安を感じ、意識の乖離が見られた。テレビやネットを見て想像する社会と現実の社会は違う。手前味噌だが、（読者にとって）新聞は受け身ではなく能動的に接するもの。読んだ後、友達と話してみると自分とは違う意見があり、より現実に近い社会を想像することができるのではないかと語り掛けた。熱心に聞いていた約 30 人の学生からは「（メディアでは）表面的な情報が多く、大切な情報が伝えられていない」など厳しい指摘も出されたが、深田氏は「さまざまな情報を比べて見るとわかることがある。最終的にはあなたが記者になってください」と切り返していた。

学生が編集した実際の新聞制作は 3 月 8 日（月）に行われる予定。





「小中の円滑な橋渡しのために」というテーマを掲げた「第2回愛知教育大学英語教育講演会」が2月14日(日)に名古屋市熱田区神宮の市教育センターで開催された。小学校での外国語活動の必須化に伴い、週1時間増などの大きく変わりつつある中学校での英語教育について、専門家の話を聞き、共に考えるのが目的で、小中学校の教員ら約250人が参加した。よりよい授業への取り組み、小中連携を踏まえた授業デザインのあり方など講師の熱のこもった講演に、教員からは「い

い話が聞けた」「参考になった」など積極的に評価する声が聞かれた。

本学の南隆太教授の司会で始まり、松田正久学長が「国際化が進む中、英語教育がどうあるべきかは重要なテーマ。今日の講演を今後、現場での活動に生かしていただきたい」とあいさつ。この日の講師は愛知県総合教育センター指導主事の犬塚章夫氏と文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官の直山木綿子氏。

犬塚氏は「中学校英語、増える1時間に何をするのか?」をテーマに講演。フォニックス教材による文字指導を紹介し「音から文字に入っていくと効果にばらつきがない。これからは英語を聞く授業をもっと考えていかないといいけない。生徒がゲーム活動で自然に(英語を)聞いてしまったとなればいいのか」と話した。ほかの教員の実践例などを紹介しながら効果的な授業を次々と具体的に説明した。



直山氏は「小・中学校の円滑な橋渡しのために」と題して講演。小学校と中学校の外国語活動の違いを説明し、「小学校ではコミュニケーションの素地を養う。世界のあいさつから始まり、いろんな言葉、生活があることを理解させてほしい。そして外国語活動を通して人を理解するためにある言葉の大切さを感じてほしい。中学校では積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、コミュニケーション能力の基礎を養ってほしいと考えています」と述べ、授業充実のための具体例も示して、教員に大きなヒントを示した。それぞれの講師には会場から質問が寄せられ、特に直山氏の講演の後には本学附属名古屋中学校教諭の植田則康氏をディスカッサントとして質疑応答が行われた。その熱のこもったやり取りからは、英語教育の新たな目標達成に向けた参加者の

意欲的な取り組みや決意が感じられた。

外国語教育講座では、小中学校の教員や本学学生、そして本学教員がより優れた教育実践に向けて学び高めあう絶好の機会として、来年度以降もこのような講演会を開催する計画を立てているが、その社会的な意義はますます大きくなりつつあることは間違いない。



企業研究セミナー(2/17, 2/18)

2月17日(水)、18日(木)の両日の午後1時から4時の間、本学大学会館大集会室で、企業への就職を目指す3年生を対象とした学内企業研究セミナーが愛知県を中心とする上場、優良企業計80社の参加を得て開催された。

このセミナーは、企業の採用試験を受ける



前に、どのような企業か、また、採用後どのような仕事をするのか等々、直接人事担当者に尋ねて研究するもので、就職活動を行う学生にとって不可欠のものとなっている。

当日は、企業研究セミナー直前に行ったガイダンスへの参加者が少なかったことから、関係者からは参加者数の減少を危惧する声が聞かれたが、最近の雇用環境を反映してか、開場と同時に多数の学生が訪れ、それぞれ目指す企業のブースで人事担当者の説明に熱心に耳を傾けていた。参加学生の中には、1日で6社のブースを訪れて説明を受けるなど、希望企業の人事担当者と直接接触できるこの機会を十分に活用していた。

なお、2日間の来場者合計は、昨年度を約40人上回る203人だった。参加した学生たちからは、「午後の3時間では短い」「もっと早い時期に実施してほしい」「もっと回数を増やしてほしい」などの意見が寄せられた。



実施事務局のキャリア支援課では、今回の参加学生及び企業へのアンケート結果や、セミナーに先立ち行われた、参加企業担当者と学長を始めとする本学役職員との情報交換会の場での意見などを検討し、来年度セミナーの運営方法や参加企業の開拓などについて改善を図ることとしている。

パキスタン教育研修閉講式(2/17)

平成21年度日本国際協力機構(JICA)国別研修「パキスタン産業技術教育」の閉講式が2月17日(水)、パキスタンからの研修員5名とJICA、日本国際協力センター(JICE)関係者、松田正久学長、研修実施担当の技術教育講座教員及び事務局関係者らが出席して行われた。

この研修は、JICAによる開発途上国の経済・社会開発に必要な人材を養成する一環として研修員の受入事業を行っており、平成20年度に続き本年度も開講したものの。



松田学長とJICA中部・稲葉所長の挨拶に続き、各研修員へ証書の授与と記念品の贈呈が行われ、研修員代表が本研修における本学とJICAの協力に対し、感謝の言葉を述べた。また、閉講式終了後には歓送会が開催され、研修員と関係者は研修の思い出話に花を咲かせ、別れを惜しみつつも楽しい一時を過ごした。

約2週間の滞在の間、研修員は講義や企業・学校訪問を通じて日本の技術教育について知見を広めると同時に、休日には浅草で伝統工芸を見学して日本文化と直に触れ合う機会も持つなど大変有意義な研修となった。研修員は帰国後、自国の産業技術の発展はもちろん、日本とパキスタン両国の相互理解の深化においても本研修の成果を活かしたいとの決意を胸に、帰国の途についた。

スケッチ画家が学長と再会(2/19)



古い町並みや民家などのスケッチを続け、郷愁をそそる絵画を制作している安城市の村瀬康司さん(73)が2月19日(金)、本学を訪問、松田正久学長を表敬訪問した。学長が休日に散歩していて偶然スケッチをしていた村瀬さんと遭遇。その後、刈谷市への統合移転40年を迎える本学を見に来てほしいとメールを送り、再会が実現した。娘さんが本学の卒業生という縁もわかったが、村瀬さんが本学に来たのはこの

日が初めて。

村瀬さんは大工道具店を営む一方、30代で絵を描き始め、春季創画京都展、中日展など各美術展で入選、特選を重ねた。消えゆく昭和時代の情緒溢れる西三河の町を描いた素描は900枚に及ぶという。村瀬さんはこの日、学内を見て回り、大きな木を見ては「これは描けそうだな」とポツリ。

学長室を訪れた村瀬さんは「話しかけられたのが学長さんとは思ってもよらなかった」とスケッチ集を披露、画集を贈呈した。学長が「素晴らしい才能をお持ちですね。私は健康維持を兼ねて歩いていますが、古い町並みが少なくなっています。機会があれば大学を描いてください」と言うと、村瀬さんは「好きで描いているだけです。描いた民家その後消えたりしています。初めは古くていたんだ民家を描くと住人に叱られると思ったが、喜んでもらえます。この大学は木がすごいですね。また描きに來ます」と快諾。二人は旧東海道などの古い町並みの街道話に花を咲かせ、学長は「また学外でもどこかで会うかも知れませんが、よろしくお願ひします」と話すなど和やかに歓談した。

村瀬さんは2月24日(水)、本学の本部棟前で第一人文棟、第一共通棟を数時間スケッチするなど精力的な制作活動を始め、「大学のいろいろな場所を描きたい。作品が完成したらお知らせします」と笑顔で話していた。



理科離れ実相調査ミニ・シンポジウム(2/20)



「理科離れ実相調査ミニ・シンポジウム～小学校教科『理科』の充実と実験授業改善に向けて～」が2月20日(土)、本学自然科学棟の物理系理科実験実習室で開催され、愛知県内の教員や学生ら43人が参加した。同シンポは毎年2月末に実施され、今回が6回目。本学は牛田憲行特別教授(理科教育)を調査責任者として1月、「小学校教科『理科』の充実と実験授業改善に向けて」と銘打ち、小学校での理科教育のかかえる諸問題について現場理科担当教師の生の声を聞くアンケート調査を実施した。

県内小学校416校を任意に抽出、209校から回答を得た。質問は理科実験室・準備室の整備管理状況、キット教材についてなど23項目で、記述式もあり、牛田特別教授は「寄せられた回答は、学校の現場で頑張っておられる先生方の“叫び”にも似た声がひしひしと伝わってきた。記述部分は原文のまま資料としたが、A4で78ページに及ぶもので、これほど多くの現場の生の声が集められたのは全国的に類がないと思う」としている。

シンポジウムではまず松田正久学長があいさつ、「科学・ものづくり教育推進に関する拠点づくり」の取り組みについて触れた。続いて牛田特別教授がアンケート調査の概略を説明。特に「多忙化ゆえに理科室・準備室の整備に人も時間も無い 教師の理科離れ」を断つには「教員全員が夏休みにでも理科準備室の片づけをする」「理科室のどこに何があるか読本を作る」ことなどが提起された。実験の苦手な教師に、夏休みを利用した実験講習会を、との声が23%、理科専任を増やすべきとの意見が42%に上ったことも明らかにされた。

教員の基調講演に移り、安城市立二本木小学校教諭 田中常和氏は、教育現場の多忙化がどうして起きているのかについて具体的に述べた。同氏によると、以前と違って今の教育現場には、非常に多くの人々が学校に入っている。特別支援教育支援員・情報教育支援員・日本語適応指導員・初任者研修後補充教員・初任者研修拠点校指導員・少人数指導員・外国語活動指導補助員・タガログ語通訳・ポルトガル語通訳で、来てもらうための「計画書」「報告書」「勤務実態書」の膨大な事務書類を毎月教育委員会に提出しなければならない。作るのは教師で、報告書の紙ば

かり作っているとして「紙に書く多忙化は教育現場から取り除いていかねばならない。むしろ子どもと接する時間が多忙化してほしい」と訴えた。

また、物理出身の校長・教頭が「理科における教員支援」について考えを述べた。蒲郡東部小学校校長の牧野敏夫氏は「小学校の先生たちは本当に多忙だが、疲弊しきってはいない。目の前の子どもを話すときの先生方の目の輝きはすばらしいものがある。小学校の理科を持ちたくないと思っている先生が増えているのは事実。高学年ほどこの傾向は大。理科という授業はチョークと黒板だけでこと足りず、実験や観察は準備があって面倒くさいとやりたがらない先生もいる」などと指摘。「理科専科の先生、理科支援員の先生が増えるのはいいが、授業は担任の先生にやってもらう方が子どものためにもいいと思う。理科はやりだしたら面白いので、嫌がらずにどの先生も取り組んでほしいというのが私の願い」とした。

詳細な報告は、科学・ものづくり教育推進センターのHPの中で見ることができます。

Bouvier氏が世界のCMについて講演(2/22)

CMの評論ではマスコミでの登場も多い「世界のCMフェスティバル」プロデューサーの Jean-Christian Bouvier 氏の講演が、美術教育選修・専攻の授業（富山教授担当）で2月19日（金）、20日（土）の両日にわたり行われた。同氏は愛知教育大学の前日は東京、本学の後には岡山、大阪と、全国の講演会で引っ張りだこの人気講師。



講義は、プロジェクターによるCMの映写紹介を通し、世界のCM表現の地域性、日本のCMにおける外国人の描かれ方の時代的な変遷などが、フランス人の視点で語られた。たどたどしい日本語で「TV出演なんかより、私は大学での講義が好きです」と、元大学教員らしい本音も漏らしていた。

授業改善シンポジウム(2/22)



本学の教育創造開発機構大学教育・教員養成開発センター、FD・学習支援部門主催による「授業改善シンポジウム～授業改善の共有を目指して～」が2月22日（月）午後3時から第5会議室で開催された。

まず、澤武文学長補佐が「授業に対する工夫や授業改善活動の重要性が高まっている中、4人のシンポジストから具体的な実践例をお話していただきます。大学として取り組むべき課題でもあり、シンポジウムが皆さんの役に立つことを願っています」とあいさつ。

続いて、シンポジウムを企画し、冊子『愛教大の「授業」！ 授業改善独自の工夫 ティップス集』の編纂に当たったセンター兼担教員の大澤秀介教授から、シンポジストの紹介が行われた。大澤教授は「授業改善の共有を目指すというのが今回の目的ですが、同時に現実に大学教育に携わっている先生方の意見に基づいたボトムアップのFDを実施したいという強い思いがあり、今回の学内シンポジウムを企画しました。そもそも教員にとって教育について語り合うということは本来楽しいものであるはず。また、そうでなければ恒常的で主体的なFD、効果的なFDは実現しないと思います。本日のFDではシンポジストの発表を聴いていただいた後、今後のFDのあり方も含めて自由な意見交換を行い、「楽しい」FDにできればと思っています」と主旨を説明した。

その後、順番に高橋真聡教授（理科教育）、見崎恵子教授（社会科教育）、大村恵教授（学校教育）、杉浦淳吉准教授（家政教育）ら4人のシンポジストが発言。それぞれが身近な題材から学生の興味を喚起し、全体を通して何を学びとらせるのかを意識した講義計画づくりや、学生と

積極的にコミュニケーションをとることで信頼関係を構築することの大切さ、学生同士の活発な意見交換を促すためコメントカードからの意見を反映させたレジメ作成、大規模の受講者を生かした講義法といった学生の主体的な学びを充実させるために授業で心がけていることについて、自身の試行錯誤に基づく実践例を示しながら発表が行われた。数十人の参加者は、事前配布されたティップス集に目をやりながら、発表者の意見に耳を傾けていた。

また、意見交換では、大澤教授が他大学の事例紹介やシンポジストからの提議を受け、「学生参加のFDをもっと実施することで教員の自己満足に終わらない授業改善や学生の主体性を育むことにつながるのではないか」と述べた。授業の一層の充実や、より効果的なFDの実践に何が必要かについて会場からは「教員コミュニティによる自律的FDこそ、教員同士が授業の悩みや問題を抱えた学生の支援について気兼ねなく話し合うためにも重要なのではないか」「学生の学習時間の減少などマイナス面の方が目立って聴かれるが、良い面を生かし、やる気を引き出す工夫が教員側にも必要なのではないか」など活発な意見が交わされ、大澤教授やシンポジストが述べた内容を体現するFDシンポジウムとなった。

教職大学院修了報告会(2/23)

大学院教育実践研究科（教職大学院）の「修了報告書」発表会が2月23日（火）、名古屋市内のKKRホテル名古屋で開催された。教職大学院は、今春、18人（予定）の第一期生を教育現場に送り出すこととなり、この日は愛知県総合教育センター研究指導主事、各教育事務所の所長、各市町教育委員会の教育長、現職教員学生の勤務校校長、学生が実習を行った連携協力校校長、教職大学院を設置する国私立大学の教員ら約60人の来賓を招いて行われた。



同研究科教職実践基礎領域（学部直進・社会人）の学生は、大学における授業と各実習の事前・事後指導、実習の成果を基にした「実習ポートフォリオ報告」を、教職実践応用領域（現職教員）の学生は、課題解決のためのプランニングを学校現場で実施検証を行う課題実践実習の成果をまとめた「課題実践報告」をそれぞれ行った。午後の分科会の冒頭で、松田正久学長が来賓へのお礼とあいさつを行った。また、報告会に引き続き行われた全体会では、県総合教育センターの研究指導主事及び県小・中学校長会会長が講評、教職大学院における学びの成果を教育現場や各地域で効果的に実践することへの期待感を示した。

前期入試を実施(2/25～2/26)

本学の学部一般入試の前期試験が2月25日（木）、26日（金）、実施された。本年度の一般入試志願者は3216人で昨年度（2881人）に比べ335人増加した。前期試験が1525人（昨年度1316人）、後期試験が1691人（同1565人）。

前期試験で最も倍率が高かったのは現代学芸課程の国際文化コースで7.0倍。教員養成課程では中等教育・音楽専攻の6.5倍だった。平均倍率は前期が2.8、後期が8.0。

入試課によると、前期試験の欠席者は74人で、第1日目の欠席率は5.0%と前年（5.8%）を下回った。大きなトラブルもなく、新型インフルエンザによる欠席者、追加試験の該当者はいなかった。

なお、後期試験は3月12日（金）に実施される。

お知らせ・投稿・報告

附属図書館ホールの愛称を募集



附属図書館の正面を入った2階フロアの中に多目的利用のスペースができているのを、皆さん、ご存知でしょうか。

スペースは121平方メートルで分割も可能な上に、壁面パネルには映像を映すことができ、音響も約30人が同時に聞くことができます。昨年4月からスタートしてこれまでに、不慮の事故で亡くなられた本学学生を偲ぶ記念展をここで行いました。さらに、ランチコンサート、作品展示、ベルリンの壁解放記念の展示

なども実施してきました。特に学生参加のイベントは好評で、2月に行われたランチコンサートでも、独唱、アンサンブル演奏、ピアノ独奏がそれぞれ熱演され、たくさんの方が聴き入っていました。

全国でも、このように図書館の中に「コモンスペース」を設けて、図書館の文化的機能をさらに高め、広げようという動きが進んでいます。本学のこのスペースが、今後も皆様に親しまれ、愛される場・共有空間となることを館長としても願っております。

そこで、このスペースにふさわしい「愛称」を皆さんから募集することにしました。構成員が、あまり構えずに集い、そして展示などの文化的発信に触れて、心を通わせ合う。そんなコモンスペースにふさわしい名前を付けていただけませんか。

応募されたものを図書館委員会で選考して、決める予定です。そして、4月から、新しい名前です。採用された方には、図書券を差し上げます。

【締め切り】3月31日（水）

【応募方法】附属図書館で所定の用紙に愛称、氏名、連絡先を記載し、同2階のカウンターに設置した応募箱に入れる。

井戸准教授からのフィンランド便り（投稿）

まだまだ寒い日が続いております。雪は時に大きな結晶となって降って来ることがあり、湿度や気温などの諸条件が揃うと肉眼で充分見える程の大きな結晶ができます。大きいものは6~7ミリはあるのでしょうか。ここへ来て初めてこの結晶を肉眼で観た時は本当に感動的でした。ちょうどフラクタルに関して研究をしていたので、寒さも忘れてずっと眺めていました。北国ならではの冬の美しさです。

さて、フィンランドでの生活も丁度折り返し地点を迎えました。今では多くの事が日常と化し、自分がここに居ることに不思議と感じていた自分はもう居ません。観光客オーラはすっかり消えてしまい、現地に溶け込んでしまったのか、街では良くフィンランド語で話しかけられるようになり、日本では滅多に飲まなかったコーヒーも一日数杯飲むようになりました。ここでは人々のコミュニケーションにコーヒーが絶対に欠かせません。その結果フィンランドは一人当たりのコーヒー消費量が世界で最も多いという統計もあります。他にはアイスクリームも世界一食べられているという意外な事実もあつたりします。ですからスーパーマーケットに行くと、驚く程の種類のアイスクリームが巨大な冷凍庫一杯に埋められています。アイスクリーム好きとしては驚き、そして感激です。

本日は今まで殆ど話してきませんでした、フィンランドの食事情についてお話ししたいと思います。



す。まず、単刀直入に一言で申し上げると、残念ながらフィンランドの食事はあまり美味しくありません。これは来た当初は勿論、生活に慣れた現在であっても変わらない感想です。いわゆるフィンランド料理というの僅かですが存在しています。代表的なものとして、ミートボールやトナカイ肉のソテー、そしてサーモンは生でもグリルでも良く食べられています。他にはカルヤランピーラッカというパンのようなタルトのような木の葉形の食べ物は、日本でいうところのおにぎりのようなもので、フィンランド人の常食です。パン屋さんでも勿論買えますが、多くの家庭ではオリジナルのカルヤランピーラッカを作っているようです。そして最も食べられているのでは？と思うのはジャガイモと黒くて固いライ麦パン。これはもはや日本の米と一緒に主食に近いものと思います。日本ではじゃがいもを様々な料理に使いますが、フィンランド人は茹でたそのままか、マッシュポテトにして食べるのが殆どです。大学のカフェに行くと必ずこのポテトが出て来るので少々減入っています。またライ麦パンは食べ放題ですが、最近私は食べることをすらなくなってきました。食文化が発達しないのには、例えば寒さで野菜や果物が育たなかったりと、素材が充分にないという事情も背景にあるように思われます。また、街に出てレストランで食事をしようとする、フィンランド料理というお店はほとんどありません。多いのはイタリア料理、フランス料理、中華やタイ料理です。日本料理も時々目にします。残念ながら外で食事をしてもそれ程美味しいことはなく、そしてその値段は日本の倍と考えていいと思います。食事に限らずフィンランドの物価は全般的に高いですが、食事は特に高いですから、外食をする時は特別な時です。

このように私から見ればあまり明るい食事情ではありませんが、フィンランド人にとってはこれが普通であり、何でもあってまた美味しい日本が異常なのかも知れません。食のシンプルさもまた、フィンランドのライフスタイルに合致したものとも言えます。

最後に極めつけを一つ。ここに来る前から「気をつけた方がいい」と言われていた謎の黒い食べ物があります。世界一不味いとも酷評されている「サルミアッキ」と言うこのキャンディのようなグミのような食べ物は、塩化アンモニウムを主成分としていて、それがために臭いも味もきつく、私達日本人にはとても食べられるものではありません。しかし、フィンランド人は小さい頃からこれらに親しんでおり、恐らく嫌いという人はいないのではないかと思います。元々は薬だったという話も聞いたことがあり、薬局でも売られていますし、スーパーでは様々なサルミアッキが売られています。私もトライしてみましたが、勿論それ以降はノーサンキューです。

(井戸 真伸)

編集後記

本号は期せずしてユニークな授業の紹介が重なりました。学生による「若者を選挙に行かせる企画」発表やホロコースト教育資料センター代表、中日新聞論説主幹、CMフェスティバルプロデューサーによる特別講義などです。拝聴させていただき、授業そのものが学生にとって小さいけれどクリアな「社会へと続く窓」になっている印象を受けました。経済環境は依然厳しい状況が続いていますが、春はすぐそこまで来ています。巡る季節を実感しながら、在学はもちろんですが、4月に大学という新しい「社会の門」をくぐり本学の一員になる学生のスタートを応援したいと思います。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二